

博士論文要旨

氏名	直田(和氣)節子
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	乙第1号
学位授与年月日	平成14年3月19日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規定第5条2項の規定による
学位論文題目	S. T. Coleridge and Platonic Revelation from Within : "Tri-unity, in Reason, Religion, and the Will"

論文の要旨

コールリッジは我々の目指すべき全人的感情を説明するうえで、主にプラトン、カント、シェリングの哲学に自らの検討材料を求めた。それ故、この論文では、我々に可能な理想的精神状態に関する彼らの論考とコールリッジのそれとの比較を試みた。これまで明らかにされていなかった、「人知を超えた存在」に対する畏敬の感情に関して、彼らの共通の見解を指摘し、更には、「宗教が詩を生み育てる」と語るコールリッジの意図が明確になる「理性、宗教、意志の三位一体」の概念に基づいた芸術的自已発展のダイナミズムを検証するためである。

プラトンが『国家』のなかで言及する *dianoia* とは、自らの「気概の部分」("the platonic *Θυμός*," *The Statesman's Manual*, CC, 65でコールリッジが「意志」と呼ぶもの)を「理性」に従属させ、感覚で捉えた現象を、英知界のアイデアを認識するために活用する精神機能である。プラトンは、*dianoia* を用いての「神に似る」ための努力をとおし、自らの非力を認め、目的の真の「実現者」の現れを祈るようになることの重要性を説く。第1章では、コールリッジのプラトン賞賛がこの点に大きく起因することを示す。第2章では、コールリッジが愛読したカントも、超自然的な助けに対する感受性を高め、「実践理性」を強めるものとして、「道徳的感情」の意義を認めていることを指摘する。第3章では、シェリング的「自己認識」によって、我々は「絶対的自我」の崇高な象徴を「意志」の力で生み出せる、とコールリッジが主張する根拠を探る。第4章で、コールリッジが定義する「第2の想像力」が生む「第2の自然」としての芸術作品には、「神の平安」(ピリピ4.7)への「同化」を「意識的な意志」で常に求める自己の姿への静かな驚嘆が描かれることを説明する。

コールリッジにとり、「神の平安」を我々に注ぎ続ける神の「絶対意志」への「信仰による同化」を求める「理性、宗教、意志の三位一体」の「意志」は、プラトンが説く *Θυμός*、カントの「実践理性」の発する「意志」、かつ、シェリングの先験的な自己の認識を導く「意志」を総合的に意味する、と結論付けることができる。このような「意志」は、神の摂理に浸される究極

の歎びに備えるための祈りを導く。その祈りを支える全人的感情が詩を生む、とコールリッジは考えていたのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、プラトン、カント、シェリングの哲学に自らの思想的根拠を求めたコールリッジ(1772-1834)の宗教思想と詩論(芸術論)の関係を解明し、体系化することを目的としている。論者は、コールリッジの『文学評伝』(*Biographia Literaria*)、『省察の栞』(*Aids to Reflection*)、『政治家必携の書-聖書』(*The Statesman's Manual*)、いくつかの講演集(*Lectures*)、『朋友』(*The Friend*)を軸に、プラトン、カント、シェリングの哲学書、さらには、多くの研究書や論文を入念に検討し、綿密な読みと考察を通して、独創性に富んだ論文を書き上げている。これらの哲学者たちと比較・対照するなかで、聖書を用いてコールリッジのキリスト教的思想体系を明確にし、宗教思想家としてのコールリッジの位置づけをしようとする論者の試みは、コールリッジ研究の新しいアプローチの方法として興味深い。

論者は本論のテーマであるコールリッジの宗教思想と詩論の本質に迫る手段として、「理性」、「悟性」、「自己認識」、「霊的感觉」としての「良心」、また「想像力」や「意志」といった言葉をキーワードとして用いている。これらの言葉(概念)はすべて、コールリッジの思想体系においては、宗教的なコンテクストのなかで解釈・定義され、原罪ゆえに不完全な存在となった人間に、救いの可能性を認知させる特別の精神状態を創造する精神機能を意味している。それは「信仰を目覚めさせる」全人的感情がフルに働く心の状態であり、「理性、宗教、意志」が完全な形で一体化するとき完成される。「内奥からの啓示」による新しい道徳的・霊的存在としての自己の確立である。

まず論者は、「生まれつきのプラトン主義者」と自称したコールリッジにおけるプラトニズムを検証する。コールリッジは、プラトンが、『国家』や『饗宴』のなかで、人間のあるべき姿は、自らの有限性と無知を認識しながらも、アイデアを追い求め、同時に、最高善(アイデア)の世界への到達を可能にする、真の「実現者」の出現を祈り求める姿だと捉えたことに強い共感を覚えた。論者は、この仲介者的イメージで描かれている「実現者」は、まさに「和解者キリスト」に通じるものとしてコールリッジは特に強い関心を抱いたことを指摘する。コールリッジは、また、プラトンが *dianoia* と呼ぶ英知界のアイデアを認識させる、特別の精神機能に注目した。*Dianoia* の力は聖書が教える「真の神を知る知力」に通じるものであるからである。論者によれば、プラトンが強調する感覚、悟性、想像力が理性に従属した精神状態は、コールリッジにとっては、道徳の実践からキリスト教信仰へと自らを高め、導くものに他ならない。(第1章)

カントの哲学のなかにもコールリッジは自分の考えと共通した思想を見出している。カントは科学的知識や道徳の上に宗教的精神を位置づけている。「人間の責任ある意志と魂の永遠性」を

強調するカントとコールリッジとの関係において、論者が特に注目している点は、カントの感情に対する姿勢の変化である。1780年代に出した、『道徳形而上学原論』、『純粹理性批判』および『実践理性批判』のなかで、感情を理性の道徳的行為の障害となるものとして拒否したカントであったが、1790年代の著作、『単なる理性の限界内における宗教』や『人倫の形而上学<徳論>』のなかでは、感情に「理性の光が当てられる」とき、その感情は靈的な導きへの感受性を高めるものになると捉えている。このとき道徳性を伴う精神機能である感情、すなわち「人間本性の内にある善への根源的素質」である「道徳的感情」が完成される。この高次の感情はコールリッジのキリスト教的道徳観に密接に結びつくと言者は論じている。(第2章)

さらに論者は、コールリッジが1813年にプリストルで行ったシェイクスピアに関する講演のなかで、「ハムレットの行動力の欠如は、かれの知性が外界からの刺激を、感覚を用いて受け入れることを拒絶し、その結果意識的に外界を遮断し、想像力が生み出す疑惑の虜となった結果である」と分析する批評のなかに、シェリングの影響を読み取っている。シェリングの『先験的觀念論の体系』を「プラトンの系譜」である「生の哲学」として、『文学評伝』のなかでイギリスの思想界に紹介したコールリッジは、シェリングの「理性による自己認識の働き」という考えに特に関心を示したと言者は指摘している。シェリングの言う自己認識は、個人の「意識的な意志」を働かせることによって可能となり、精神と自然、主体と客体といった相反する力の間で絶えず生じている融合と創造のプロセスを感じ取りながら、「絶対的自我一神」を認知する力が備わった自我の確立を目指すのである。(第3章)

本論文の最終章は、コールリッジ特有の、詩人の宗教的創造性について論じている。詩は、論者が言う三位一体が成就された状態を創造的想像力によって具現化するものであり、そこには永遠なるものとのこの世的なものが完全な形で融合・統一されている。それゆえ、詩は創造者である詩人の祈りあるいは信仰告白そのものであり、読者にとっては、最も祝福された状態を実現する可能性の提示となる。コールリッジにとって、究極的には、詩は神の存在を証しするもの、そして「生きた真の言葉」に最も近いものに高められるべきものとなる。

論者は、コールリッジは著作のなかで自らの宗教思想に立脚した独自の崇高論を提示した美学者でもあると指摘する。コールリッジは「美」と「崇高」の差は種類ではなく、度合いの差とみなしていると論者は説明する。「意識的な意志」を伴う瞑想を通して、美と捉えられる対象の中に靈的なものが感知されるとき、「崇高」が認識される。ここで、コールリッジの有名な想像力の定義が重要にかかわってくると論者は言う。第1の想像力が日常の慣れ親しんでいる世界を創造する力であるのに対して、第2の想像力は詩を創造する力であるとともに、第1の想像力の産物に生命を吹き込み、永遠性を与える力である。詩人は「人間の全精神を活動させる」存在であり、そういう宗教詩人コールリッジにとって、第2の想像力は全人的感情を完成させ、人間を少しでも「神に似る」状態に近づけようとする、プラトンの *dianoia* 的な働きをする精神機能なのである。(第4章)

宗教思想家・詩人コールリッジについて独創的な観点から考察された英語による本論文で、論者は、コールリッジの宗教思想・詩論を論理的に、かつ説得力を持って論じ、その解明と体系化に成功している。しかし、同時にコールリッジの詩論の実践について、また観念論に還元しきれない曖昧さや深みといった、かれの詩に内在する特異性についての検証が十分になされていないという印象は否めない。第4章で「老水夫の唄」や「クリスタベル」といった代表的な作品に言及しているものの、表面的な説明で終わっているのが惜まれる。しかしながら、本論文の主目的はコールリッジの根本思想の哲学的解明にあることを考えれば、この物足りない印象は本論の価値を低めるものではない。宗教詩人コールリッジの詩論の実践についての検討は、論者のこれからの研究に期待したい。

論者の研究者としての独創性は二つの点で顕著である。思想家あるいは哲学者としてのコールリッジの研究は、主に海外の研究者たちによってなされてきている。特に、コールリッジの宗教思想における感情の重要性については、多くの研究者によって論じられている。しかし、コールリッジは、霊的存在としての人間のあるべき姿は「理性、宗教、意志の三位一体」の完成にあると捉え、またその「三位一体」に導かれて生じる感情である全人的感情を自らの宗教論と詩論の根底に据えた、とする論者の指摘は今までなされていない。プラトン、カント、シェリングの哲学とコールリッジの思想の詳細な比較を通して論者自らが引き出した結論に基づくこの指摘は、思想家コールリッジを吟味する上で新しい可能性を提示するものとして評価できる。

また論者の独創性は、コールリッジの宗教思想を解明する上で聖書が不可欠であることを実証した点にも見られる。コールリッジ自身が著作のなかで聖書からの引用を用いながら自らの思想を展開させている事実を考えれば、当然のことながら、最終的には聖書こそがコールリッジの宗教思想の根幹であるといっても過言ではない。わが国においては、聖書やキリスト教教義に基づいたコールリッジ研究はほとんどなされていない現状を考えると、本論文は、コールリッジ研究のみならず、イギリス・ロマン主義研究に対して大きく貢献しうる論考として重要である。独自の視点に立った研究方法が確立され、また明確なコールリッジ研究の方向性を示している本論は、論者がこれまで研究者として積みかさねてきた研鑽の結実であり、これからの研究活動のよい指標となるにちがいない。

以上、本審査委員会は、本論文を博士号にふさわしい学術論文であると認め、審査は合格と判定する。

2002年2月6日

審査委員

主査 泥谷 征人

副査 平井 雅子

副査 金城 盛紀